

健康文化

バリアはフリー？

渡邊 順子

21世紀を間近に控え、厚生省は日本人の4人に1人が65歳以上の高齢者となる「超高齢社会」への突入に危機感を強めています。しかし、ここで勘違いしやすいのですが、高齢者というと自分で自分自身のことができない「要介護老人」や「寝たきり老人」のことに錯覚しそうになることです。

たしかに、高齢化の進展とともに介護を要する高齢者は急増し、寝たきり、痴呆および虚弱を合わせた要介護高齢者等の数は、2000（平成12）年には280万人、2025（平成37）年には倍近い520万人に達すると厚生省は推計しています。

ただし、それらの数字は高齢者全体の1割程度で、残りの9割は、若い人に負けないくらい、むしろ基礎体力の低下している子供たちより元気な人から、杖をついて歩行する人まで、一応身体的に自立して生活できる高齢者なのです。

とはいうものの、65歳以上になれば、一見元気そうに見えても、加齢に伴う手足などの筋力の低下や、視聴覚などの感覚の変化が生じてくるのは仕方のない事実です。つまり、高齢社会とは程度の差はあるものの、障害をもった人々が増える社会になるということになります。

高齢者の多くは、つまずきやすい、階段がづらい、人の声が聞き取りにくい、文字が見にくい、表示・案内がわかりにくい……などなど、日常生活での不便さを感じていますが、「年のせい」にして我慢させられている気がします。

1994年、「ヒトに優しいモノ作り」をコンセプトに異業種間で結成されたE&Cプロジェクト(Enjoyment & Creation)が、「バリアフリー」という言葉を初めて世に出して大きな反響を得ました。

「バリア」とは、身体障害者、高齢者、妊産婦、けが人、病人そして子供たちの立場から見た生活環境上の「障壁」、すなわち、不便さや不具合のことを意味します。つまり、「バリアフリー」は「あらゆる人たちの生活上不便な障害を取り除く」といった意味あいになります。

そこで最近、私自身が経験した事件(?)から「バリアフリー」について、考えてみたいと思います。

それはある新病院での出来事でした。

<自販機コーナーにて>

熱いカップコーヒーを飲んでいた老婦人がなにげなく、さきに同じカップコーヒーを飲んでいた私に話しかけてきました。

「さとうとミルクはどれで選ぶんでしょうね？」

「えっ？ どれって？」

「ええ、このコーヒー何も入ってないんですよ」

「ああ それなら、同じコーヒーでさとう・クリームのついているこのボタンを押さないと・・・」と言いながら、ボタンを指さしてあげると、

「あら、そんなところに書いてあったんですね。全然読めませんでした。」

「そうですね、ちょっと読みにくいですよ。」

実は、私自身もほんの数分前にそのボタンの違いが識別できたところだったのです。確かに、グレーの背景に同じグレーで小さく書かれた文字は読みにくく、判別しにくいものでした。

このとき、私の母も同じような経験をしたことを思い出しました。母の場合は、自販機に500円玉を入れたら返金口に戻ってきたので、また、同じように投入口に入れて……ということをして2～3回繰り返していたら、小学生らしい子どもが寄ってきて、「おばちゃん、釣り銭が切れてるから500円は使えないよ」と言われて、初めて釣り銭切れのランプが小さくついていることがわかったのです。母は、「あのランプってわかりにくいよね。」と不満気だったのです。

最近の自販機は、とてもおしゃれになってディスプレイもすてきです。安全面の配慮も数段よくなっています。さきの、コーヒーの自販機もドリップコーヒーが抽出し終わると、自動的に取り出し口が開くようになっていました。これには「うーん、すごい」と感心しました。でも、使いにくいんです。

<トイレにて>

コーヒーを飲み終えてトイレの前を通り過ぎようとしたとき、4人連れの老婦人が2つ並んだ洋式トイレの個室を出たり入ったりしているのです。

一瞬、「誰か気分でも悪いのかな」と思っていたら、私に気づかれた方が、「これをこうやって押せば流せるんですよ。」と言って、便器の後ろにある水タンクの黒くて丸い(直径5cmくらい)ボタン状のものを一生懸命両手で押して

るんですが、一向に水は流れません。

私も、「おかしいですね?」と言って、その人と変わって押してみると、「ん? なんか変」

その黒いボタンは、便器のふた止め（ふたを開けたときに陶器製のタンクにあたらぬように黒いゴムでできているもの）だったのです。

そのタンクの右横をみると、“PUSH”と彫られた金属製の大きな（ちょうど手の甲におさまるくらい）ボタンがついていたのです。

「これですね」と言って押してみましたが、1回ではダメで思いのほか強く押さないと水は流れませんでした。

確かに、力学的に考えてもこれは不合理な動作です。上から下へ押ししたり、体の前方へ押ししたりすることは日常的によくある動作ですが、右手から左手方向に押すという動作は、それも中腰姿勢で行うことは通常あまり経験しません。また、ボタンではなくセンサタイプであれば力は要らなくて楽にできるのですが、このボタンの場合は思いっきり押すだけでなく、少し回転を加えないとうまく水は流れてくれないのです。

何回か繰り返してやってみましたが、だんだん腹立たしくなってきました。どうして、これを病院に設置しようとしたのでしょうか？ 従来からあるレバー式のものでは何か不都合があったのでしょうか？

これもやっぱり、お年寄りには使いにくいものでした。

<公衆電話ボックスにて>

トイレ騒動の後、電話をかけようとトイレの近くにあったおしゃれな電話ボックスに入りました。

ボックスに入ったとたん、「停電?」と勘違いするほど暗いのです。ボックスが置いてある同じフロアは、明るいのにその中は異様に暗いのです。ボックス内の専用の明かりは無く、採光はボックスのドアと右横の格子ガラスから入る廊下側の照明だけでした。

手帳の文字と電話番号が読みづらくて、苦労しました。

まるで、バーの片隅から怪しげな電話でもかけているような妙な気分になりました。

その数日後、JR名古屋駅での出来事です。

<きっぷ売り場にて>

体をそっくり返さんばかりに運賃表を見上げていたお年寄りが、たまりかね

て近くにいた中学生に尋ねていました。
「大垣まではいくらって書いてあるのかね？」

E&Cプロジェクトが最近行った高齢者に関する調査報告によれば、75歳以上になると、老眼鏡をかけても細かい文字は読めないという人が17%もおり、テレビの音声や人の話し声が聞き取りにくくなったと感じている人が74歳以下では19%に対し、75歳以上では40%と2倍になっています。

高齢者の半数以上は、週に1、2回はバスや電車を利用して外出をしていますが、外出の障壁となっている問題点は多く、特に、公共交通機関やその周辺での不便さを感じています。

なかでも、高齢者はトイレを使用する頻度が高いため、トイレについて不具合を感じている人が全体の8割を超えています。改善要望の第1位は、わかりやすい案内表示で、使いやすい設備を求める意見が多くみられます。

デザインは美しくても、高齢者には文字が小さすぎたり、区別しにくい色やコントラストを用いていたたり、見る人の位置と表示される場所の関係が設計段階で配慮されていない表示や案内が多くみられます。

高齢者にとって「バリアフリー」であることは、今は高齢者ではない人たちにとってもきっと、快適に違いありません。また、逆に今は高齢者ではない人たちが使いにくいモノは高齢者にとっても、不便なモノでしょう。

病院通いする高齢者の快適生活空間を真剣に考えることが「超高齢社会」を豊かに支えられるような気がします。

あなたの周りの「バリア」は「フリー」ですか？

(名古屋大学医療技術短期大学部講師・看護学科)